

高麗神社（埼玉県日高市）再訪

—朝鮮植民地支配の残影—

糟谷政和

1. はじめに

筆者は2002年9月19日と21日に埼玉県日高市の高麗神社を訪問した。その時高麗神社の社務所には、筆者が1998年に訪問した時にはなかった10頁ほどの高麗神社紹介冊子『高麗神社』（日韓・日中・日英対訳の3種）が販売されていたが、その冊子の表紙裏の1頁目の「創建の由来」にはつぎのように書かれている。

当社は、高句麗からの渡来人高麗王若光を祀る社である。高句麗は紀元前1世紀ごろ建国され、668年に滅びるまで、主に中国東北部および朝鮮半島北部を領有した。若光が日本に渡来した年代は『日本書紀』により天智天皇5年(666)10月と考えられる。高句麗から使わされた使節のなかに「二位玄武若光」の名が記述され、高麗王若光であろうと推測できるからである。次に若光の名が文献に表れるのが『続日本紀』大宝3年(703)3月「従五位下の若光に王(こきし)の姓(かばね)を賜う」である。姓とは、それぞれの家柄を定めるために大和朝廷が授与する称号で、王の姓は外国の王族の出身者に与えられた。その後、霊亀2年(716)5月、大和朝廷は駿河(静岡)甲斐(山梨)相模(神奈川)上総・下総(千葉)常陸(茨城)下野(栃木)の七国から高句麗人1799人を武蔵国に移し「高麗郡」を創設した(『続日本紀巻七』)

この時、郡の長官に任命されたのが、高麗王若光である。若光は郡内の高句麗人をよく指揮し、未開の地が多かった当地を開発して、先進的な文化を伝え、この地で没した。郡内の民は、若光の遺徳を賛え、霊廟を建立し「高麗明神」と称えて、高麗郡の守護神とした。これが当社の創建の由来である。高麗神社の祭祀は若光の長子家重以後、子孫によって継承され、現在に至っている。

この由来に続いて、「獅子舞」「宝物・文化財」「高麗氏の歴史」「神域俯瞰図」「四季」「高麗家住宅」「高麗郷」そして裏表紙の「案内図」があり、見学には非常に便利な内容であり、今回詳しく神社内を見て回る事ができ、そのためにあらためて気づいたことも多かった。

ところで筆者はすでに、1998年に高麗神社訪問の印象と日韓(朝)交流史関連の授業の教材のひとつとしての高麗神社の意味について論じたことがある⁽¹⁾。しかし今回、再度高麗神社を見学して、

以前1998年に訪れた時に気になっていた点を再確認することができた。それは、戦前には日本による朝鮮植民地支配遂行上必要であった「内鮮一体」「内鮮融和」の掛け声のもと、高麗神社が利用されてきた歴史を物語る遺物・資料の存在であった。そこで、まず高麗神社の現在の状況を報告し、その上で高麗神社を歴史教育の教材としようとする時に留意する必要があると思われる点について述べたい。

2. 高麗神社境内に残る植民地支配の残影

県道から神社へ入る参道の入口の一の鳥居手前右手に5 m程の石柱がある(写真1)。この石柱の前面には大きく「高麗神社」、向かって右の側面には「朝鮮総督 陸軍大将 南次郎」、左の側面には「昭和十四年建之」と彫られている。この南次郎は、1936年(昭和11)8月から1942年(昭和17)5月までの第7代の朝鮮総督であり、1937年に日中戦争が始まると「内鮮一体」をスローガンに皇民化政策を推進した^②。1939年(昭和14)は国民徴用令施行、朝鮮人強制連行が始まった年である。

さらに参道を進み、二の鳥居を通過して手水舎先に3 m程の石灯籠が左右に1基ずつある(写真2)。このうち、社殿に向かって左側の灯籠の後面には「朝鮮総督府関係高等官一同」、向かって右側の灯籠の後面には「昭和十五年建之」と彫られている。

その先の参道途中の社殿に向かって左側に2本の杉の木がそびえている。その2本の杉の木の前にはその献木の由来を示す木製の杭がたっている。まず社殿に向かった参道手前の杉の木にたてられた杭の前面には「李王妃方子女王殿下御手植」、後面には「昭和十一年十一月二十一日」とある。そして2 m程社殿側にある杉の木にたてられた杭の前面には「李王垠殿下御手植」、後面には「昭和十一年十一月二十一日」とある。なおこの「李王垠殿下」とは、高宗の3男で朝鮮王朝最後の皇太子であった李垠(1897-1970)であり、「李王妃方子女王殿下」とは、この李垠と1920年4月28日に結婚した梨本宮方子のことである^③。

さらに参道を進むと狛犬が左右に1基ずつある(写真3)。この左右の狛犬の台座の後面に左右同様に「朝鮮総督府 中枢院参議一同 昭和十六年六月」と彫られている。

そして社殿に登って行く石段手前に2 m程の石灯籠が左右に1基ずつある(写真4)。この左右の石灯籠には左右同様に、灯籠本体の前面には「献燈」、灯籠本体の後面には「十四年十月」、灯籠台座の後面には「高麗神社奉賛会理事一同」と彫られている。この「高麗神社奉賛会」というのは、「高麗神社及び高麗王遺跡を顕彰し、社殿の改修、境内の拡張を行うことを目的として」、1934年に東京に事務所を置いて組織されたものという^④。また高麗神社発行の3つ折り6頁状のパンフレット「埼玉県日高市高麗神社ご案内」(2002年9月19日訪問時に購入)によれば、1934年に「高麗神社奉賛会」会長の児玉秀雄が参拝していることがわかる。

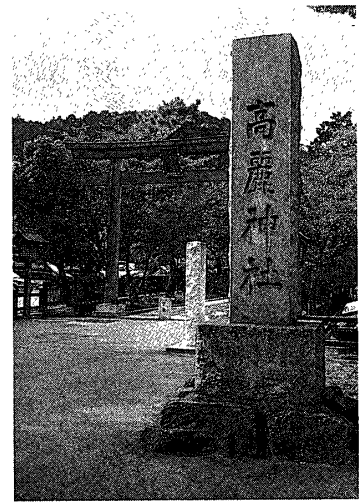


写真1 「高麗神社」 銘石柱
(2002年9月21日筆者撮影)



写真2 「朝鮮総督府関係高等官一同」銘石灯籠
(2002年9月21日筆者撮影)

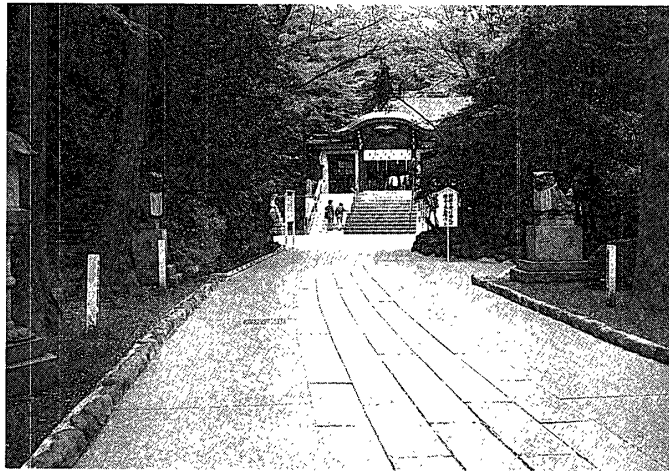


写真3 「朝鮮総督府中枢院参議一同」銘狛犬
(1998年4月12日筆者撮影)



写真4 「高麗神社奉賛会理事一同」銘石灯籠
(2002年9月21日筆者撮影)



写真5 社殿神門扁額（1998年4月12日筆者撮影）

そして石段を登って入る社殿入口の神門扁額の中心には右から書かれた「高句麗神社」の文字、さらにその左横に縦書きで「朝鮮人 正二品趙重應 謹書」とある（写真5）。この趙重應（1860-1919）は、1898年に当時大韓帝国の金弘集内閣崩壊後に日本に亡命し、1906年に特赦で帰国した⁵⁾。なお後出の『高麗神社と高麗郷』によれば、趙重應は1900年（明治33）7月17日に高麗神社を訪れていることがわかるが扁額の文字との関係まではわからない（同書、19頁）。趙重應はいわゆる親日派であり日本との関係が深い人物である。

また社殿隣の参集殿の前にはいわゆる皇族の参拝記録である「光荣録」という縦書きの説明版があるが、その中に「昌徳宮王世子李玖殿下 昭和十七年十一月五日」「李冲 右同日」「昌徳宮李王垠殿下 同年十一月二十一日」「昌徳宮李王妃方子女王殿下 右同」「昌徳宮王世子李玖殿下 右同日」「昌徳宮李王妃方子女王殿下 昭和十八年十二月五日」「昌徳宮王世子李玖殿下 右同日」という記録が含まれている⁶⁾。

3. 戦前・戦後における高麗神社のもつ意味合いの変化

2002年9月21日現在、高麗神社社務所では『高麗神社と高麗郷』という冊子を販売している。この冊子は1931年に初版が発行され、1995年に高麗澄雄氏（高麗神社宮司）編集兼発行者・発行所高麗神社社務所という形で重版増補されたものである。この『高麗神社と高麗郷』は初版が戦前ということから日本による朝鮮植民地支配の影響を受けた記述部分が多いが、重版増補されてもまだ植民地支配の影は払拭されていない。このことは、戦前において高麗神社がどのように位置づけられていたかを知る上で貴重であるので、少し考えてみたい。

まず、『高麗神社と高麗郷』の冒頭にある日付が1931年（昭和6）の中山久四郎「序文」には、「内鮮融和」にとっての高麗神社の位置付けがつぎのように強調されている⁷⁾。

武蔵国の高麗郡及び新羅郡，甲斐の巨摩郡，摂津の百濟郡，その他諸国に於て朝鮮古代

の国名を以て、都邑の名、山川の名、原野の名となすもの少なからざることを思へば、内鮮の歴史的関係、及び内鮮融和共栄の上より見て、一種無限の思慕感懐の念の油然而して起るを禁ずること能はざるなり。(中略) 当主高麗興丸君及び其子明津、博茂二君とは年来の交誼あり。今般同家は、祖先以来の高麗史伝を修成し、また高麗氏系図を編輯して、以て先徳を表し、且つ後世に伝へんとす。其本を思ひ祖を懐ふの至誠は以て追遠帰徳の美拳として人を感じしめ、又内鮮融和の史伝と時務にも補益することも、亦大なりといふべし。

ここにみる、「内鮮融和」の好例として高麗神社を利用するということは、1940年に朝鮮総督府中樞院調査課編で出版された『朝鮮の国名に因める名詞考』でも強調されている。同書第2章「神社」で「高麗明神 高麗大宮（武蔵・埼玉県）」との項目で2頁にわたって高麗神社について、『大日本地名辞書』・『新編武蔵国風土記』稿・『高麗郷由来』などを使って記述しているが、注意しておきたいのは中樞院の編集意図と著者今村鞆の執筆意図である。

まず中樞院の編集意図については、同書の「序」（日付1940年1月）で中樞院書記官長の大竹十郎は、高麗神社が「内鮮一体」のひとつの根拠となる点を強調してつぎのように述べている⁸⁾。

本書は本院囑託今村鞆氏の執筆に係り、其内容は書名の示す如く古代より徳川時代までの間に於てカラ・ミマナ・クダラ・シラキ・コマ・カウライ・テウセン等半島の国名ある名詞計四百十有七許を詮索蒐集して考証したもので、編者の主旨は、内鮮関係特に其文化のつながり血脈の交流が今人の予想外に古く深く繁かりしを暁るべく資料の一斑を提供するに存するものである。今や半島の同胞は奮然起ちて皇国臣民たる自覚の下に興亜大業の鴻謨を奉戴し尽忠報国の赤誠を披瀝して活躍しつゝある。一方志願兵制度の実行、氏の創設等も施行せられ桑椹一域渾然融和に向って更に拍車を推すの秋に方り、本書の如きは内鮮一体の思想に有力なる一根本を加ふるものと謂ふべく時機投合の著述たるを失はざるものと信ずる。

さらに著者である今村鞆は「序」のつぎにある「例言」（日付1940年1月）でやはり「内鮮一体の觀念に更に一の根本を与へんとするもの」と執筆意図を語っている⁹⁾。

このような脈絡の中で、高麗神社は戦前のある時期、日本による朝鮮植民地支配遂行上必要であった「内鮮一体」「内鮮融和」の好例として政治的に利用されていたことがわかる。さらに『日高市史 通史編』によれば、すでに高麗神社を組織的に支援する体制が整備されたことがわかる。つまり1919年3月1日の3・1独立運動への対応が契機となって、1920年10月に高麗神社が神饌幣帛料共進神社に指定され、それにともない朝鮮半島からの観光団来訪が始まったこと（1922年まで）、さらに1923年に「財団法人高麗王遺跡保存会」設立、1934年に「高麗神社奉賛会」が設立されてい

たのである¹⁰⁾。

しかし、1945年8月15日の日本の敗戦後、高麗神社は出世の御利益を看板としてきた（「出世明神」）。また多くの韓国駐日大使の境内植樹があり、韓国からの旅行者と在日韓国・朝鮮人の参拝などもある。そして一の鳥居脇の駐車場には、朝鮮半島で村の守護神とされる木製の2本の神像である「天下大將軍」「地下女將軍」が、1992年10月25日に在日本大韓民国居留民団中央本部によって建てられている。このような状況からみて、現在の高麗神社は日韓（朝）友好のシンボルとしての性格をもつ神社へと生まれ変わったと思うことも可能である。そしてこの変化については、戦後、宮司の高麗澄雄氏（当時國學院大生）がつぎのように語っていたといわれることから類推できるかもしれない¹¹⁾。

高麗神社は戦時中に日本と朝鮮の民族融和に利用され、政府要人の参拝が多かった。日本の敗戦と共に朝鮮が独立してからはそうした政治利用の参拝者は姿を消したが、高麗神社は政治家には御利益があるというので選挙になると参拝が増え…（略）

確かに、この高麗澄雄氏の言葉にもあるように、高麗神社にとっては「内鮮融和」は過去のこととなり、2002年9月現在高麗神社社務所で販売されている冊子『高麗神社と高麗郷』の中に重版増補後も残る「内鮮融和」関連の記述部分は、単なる歴史的資料としての意味をもつにすぎないと捉えればよいのだろうか。

ただ、この高麗神社のもつ意味合いが戦前と戦後では大きく変化したことを考えると、現在何気なく私たちが日韓（朝）交流史教育の教材として利用しているものの中にも高麗神社と同様の配慮が必要なものがあるように思えてならない。

注

- (1) 「高麗神社（埼玉県日高市）を訪ねて」『茨城大学人文学部紀要コミュニケーション学科論集』第6号，1999.7，105-112頁。
- (2) 朝鮮史研究会編『朝鮮の歴史 新版』（三省堂，1995年），290頁。
- (3) 李方子『歲月よ王朝よ 最後の朝鮮王妃自伝』（三省堂，1987年）に詳しい。
- (4) 『日高市史 通史編』（日高市史編集委員会・日高市教育委員会編集，埼玉県日高市発行，2001年）742頁。
- (5) 『韓国民族文化大百科事典』20（韓国精神文化研究院，1991年），628頁。
- (6) いずれも旧韓国王族である。
- (7) 『高麗神社と高麗郷』「序文」1及び4頁。
- (8) 朝鮮総督府中枢院調査課編『朝鮮の国名に因める名詞考』（朝鮮総督府中枢院，1940年。ただし引用は第一書房が2000年11月に復刻したものによった。）「序」1-2頁。

- (9) 同書, 「例言」1頁。
- (10) 前掲『日高市史 通史編』742-743頁。
- (11) 金光林「高麗神社からみた朝鮮渡来文化」『比較文化研究』第64号（東京大学比較文学会, 1993年12月）47頁。